

[メルディア]

一般財団法人メルディア広報誌

MELDIA

創る未来

知的障がい者と共に

描く未来

知的障がい者と共に

大矢真那
による取材

障がい者を応援! いきいきと働こう!

らんどね空と海 / 藤田承紀 × 大矢真那

布施博による取材 布施博が訊く

Ubdobe HALU × 布施博

特別対談 in 東京教育技術研究所

今井浩司 × 榎本喜明

人気連載エッセイ 知的障がいを持つ息子と私

水越けいこの「M size / はじまり」

月刊メルディア
VOL.5
TAKE FREE

MELDIA

2018
MAY

VOL.5

月刊メルディア 5月号 2018年3月25日発行 (毎月1回25日発行) 第5号 通巻5号
発行所/一般財団法人メルディア事務局 〒163-0632 東京都新宿区西新宿1-25-1 新宿センタービル32F

TAKE FREE



Design Your Life

MELDIA
GROUP

同じ家は、つくらない。



メルディアグループ

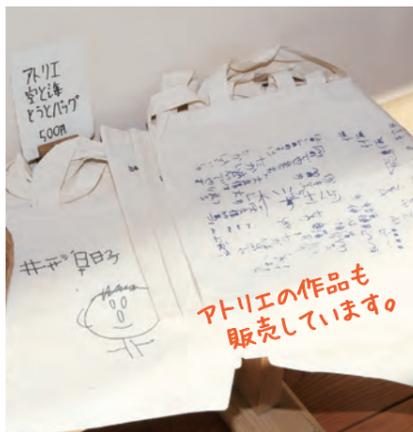
<http://www.meldiagroup.com/>

株式会社三栄建築設計
〒163-0632
東京都新宿区西新宿1-25-1
新宿センタービル32F

25th
ANNIVERSARY

まだ25年、
これからのメルディア

大矢真那
による取材



障がいを持って
生まれた子は
誰でも必ず
特別な才能を
持っている

「らんどね空と海」は完全予約制で営業しているイタリアンレストラン。シェフの藤田承紀は、ダンスインストラクターでもあるという特異な経歴を持つ。片側の聴力が無いという障がいを持つ藤田には障がい者を持つ子を持つ子は必ず特別な才能を持っている」と藤田は言う。ここに障がい者を社会に受け込ませるヒントがあった。



らんどね
空と海

菜園料理家。イタリア・トスカーナ地方のレストラン「IL PELLICANO」や、ローマの老舗「AL CEPPO」にて伝統的なイタリア料理を学ぶ。自然農法、有機農法による野菜作りにも取り組んでいる。



Y 藤田 承紀
Yoshiki Fujita



M 大矢 真那
Masana Oya

回り道や寄り道しながらでも 目的地に辿り着ければいい

大矢 こちらの施設を紹介をお願いします。
藤田 元々ここは「空と海」という施設なんです。最初は紙漉き（かみすき）の作業場から始まりました。施設長の奥野さんと理事長の大野さんを含めた数人で始めたそうです。そこで作られた和紙が評判を呼んで成功したように、その後刺し子や刺繍、織物、木工などを徐々に展開していったようです。
大矢 それらは全部が手作りなんですか？
藤田 そうですね、制作から仕上げ、出荷まで全て手作業です。
大矢 その作業所にレストランが併設されている

る感じなんですね。ところで、名前の「らんどね」とはどんな意味なんですか？

藤田 「らんどね」はギリシヤ語で、「散歩道」や「回り道」という意味です。「平坦な一本道でなくても回り道や寄り道しながらでも目的地に辿り着ければいいじゃないか」という意味も込めてあります。

大矢 なるほど。藤田さんがシェフになったきっかけは何ですか？

藤田 ダンサーだった時に膝の半月板を損傷してしまい、踊れなくなりました。その時の主治医に、食事のことも言われました。いま思えば、マクロビオティック（※1）的な話だったと思うんですけど。ケガの後、リハビリを兼ねてイタリアで世界遺産巡りをしていたんです。その時イタリア料理に触れ、興味を持ちました。

大矢 本場の料理に魅せられたんですね。

藤田 そうです。ある料理コンテストで優勝しちゃいました。「これは責任もあるなあ」と思って、イタリアへ料理修行に行きました。

大矢 こちらは自家菜園で野菜も作っているそうですね。

藤田 船橋市には福祉施設が多いんです。船橋は福祉や雇用にも篤い市です。ありがたいことに、「らんどねで働かせたい」と希望される保護者の方も大勢います。そういう意味では、求人には困りませんし、個人的には彼らを雇った後に何か苦勞を感じたことも無いですね。

彼らは障がい者 ではない 個性の振り幅が 大きいだけ

大矢 障がいを持つ人たちを雇用するにあたって大変だと思ふ事とかありますか？

藤田 船橋市には福祉施設が多いんです。船橋は福祉や雇用にも篤い市です。ありがたいことに、「らんどねで働かせたい」と希望される保護者の方も大勢います。そういう意味では、求人には困りませんし、個人的には彼らを雇った後に何か苦勞を感じたことも無いですね。

大矢 レストラン事業を含めて、今後の展望や展開などを教えてください。

藤田 料理に関しては、今は料理を作っただけですから、今後は自分たちで加工して作ったものを販売するとかはやりたいですね。ここで働いている障がい者スタッフは、誰もが才能の塊だと思っています。ただ、凄く優しいのに上手く喋れないとか、体力無いけどセンスは良いとか、個性の振り幅が大きいだけなんです。だから彼らが出来た部分だけを伸ばしていければ良いと思っています。



藤田 日本に帰ってきてから、素材のことをもっと知りたいと思って農業を始めました。そこから本格的な菜園料理家としてのスタートになります。

大矢 こちらのレストランで働いていらっしゃる方たちは、どういった障がいを持っている方が多いのでしょうか？

藤田 僕は、彼らの障がいの事をよく知らないんですけど。いちいち確認もしないし。「これ出来る？」って聞いて、「出来る」って答えればやってみよう感じですよ。

大矢 「出来る」という事をお願いします、と。

藤田 大体、出来るって言って、実際には出来なかつたりするんですけどね。（笑）

大矢 ここでは障がい者の方が何人くらい働いているのですか？

藤田 今日だと障がいを持つスタッフが4人です。うちでは予約制でお客様をお迎えしている

大矢 誰でも、個性や癖みたいなものは必ずありますからね。

藤田 そうなんです。だから、彼らを作業所などに閉じ込めるかのようにするのはなく、一般社会に溶け込んで行けるシステムを作れたら、お互いにハッピーになれるんです。障がい者の求職数に対して、その受容数が少ない。一般社会はもちろん、一般企業でも彼らを受け入れる体制を整えて行って欲しいです。

大矢 お互いが一緒に過ごすからこそ「分かる」、「分かり合える」ところってありますよね。

藤田 本場にそうなんです。私たちと彼らは何も変わりはないんですよ。ただ助けてあげよう、という考え方は無くても、もっと彼らに対しての理解を深めて欲しいと思います。彼らだけでなく、誰にでも必ず、他人（ひと）より秀でた能力があるのを認めてあげるべきなんです。



「らんどね空と海」
住所：千葉県船橋市神保町177-8
●レストラン営業／月～土
●営業時間／11:30～16:00
※ランチは木、金、土（11:30～14:30/L.O 14:00）
のみの完全予約制

らんどね空と海 <http://www.jizokai.com/>



※1 食事から人の健康的な生活を考えるという理論や思想。玄米菜食、穀物菜食、自然食を指すこともある。

一般財団法人「メルディア」とは

障がいのある方を支援する活動と、スポーツ(サッカー等)を行う児童・青少年を支援する活動を通じて、人々と社会に広く貢献することを目的として設立されました。

「メルディア」の基本理念

一般財団法人メルディアは社会的・経済的ハンディを抱える方々の「未来」に少しでも希望が持てるように、財団の活動を通じて支援し、社会貢献してまいります。

知的障がい者支援

障がい者の子供を持つ親の苦労や不安は計り知れないものがあります。さらに、親が「片親」の場合は、経済的負担や苦労・不安もその親1人で背負わなければならない状況です。不安な生活の中で、情報交換もあまりできない方々の情報源となるような刊行誌を定期的に財団で作成し、そういった方々への有益な情報提供と、障がい者の持つ課題等を広く社会に知ってもらうこと、そして様々な企業や個人から、支援団体などに対する寄付を募ることを目的として、本誌「MELDIA(メルディア)」を発行し支援活動を行います。

青少年スポーツ支援事業

家庭の事情等で経済的に恵まれない 青少年のフットボーラーのための奨学制度

アルゼンチンのロサリオ出身のリオネル・メッシは、経済的に恵まれない低所得な家庭に生まれましたが、チームが彼を支援し彼も成長して世界を代表するフットボーラーとなりました。メッシは才能を評価され、たまたま支援を得られました。しかし青少年の中には、才能があっても経済的な家庭の事情で、サッカーをする環境に恵まれずに支援がないまま、選手としてプレイを諦めざるを得なかったり、適切な環境でプレイすることができない人たちもいます。そういう若者が、日本にも数多くいるのが実情です。

そのような青少年フットボーラーがプレイを継続するために、「頑張る人を支える奨学制度」を財団法人メルディアが実施し、社会に貢献をしたいと考えています。

財団概要

名称 一般財団法人メルディア
(英文名: general foundational juridical person MELDIA)
設立者 小池 信三
設立日 2017年5月23日
所在地 〒163-0632
東京都新宿区西新宿 1-25-1
新宿センタービル 32F
電話 03-5381-3213
URL <http://meldia.org/>
MAIL prd@san-a.com



ALL ABOUT MELDIA

「メルディア」とは?

「メルディア」とは、イタリア語である「メダリア」の造語で「メダルを」という意味です。財団メルディアは、『輝かしい人生』を手に入れて頂きたいという想いが込められた名称です。障がい者本人に加えその家族、また経済的な理由からスポーツが続けられない青少年など、「社会的なハンディキャップ」を持つ人々に対して『夢を諦めることなく挑戦することができる』ように支援をしていくことを目指しています。

MELDIA



トウテミル!

知的障がい者の雇用について問うてみる



MC/女優
右手ナギ
うて・なぎ

やってみたかった事に挑戦 常識を覆す出会いが面白い

今回お話を伺った「らんどね空と海」の藤田シェフは興味を持ったモノにどんどんチャレンジして道を切り拓いて来た人でした。

この「らんどね空と海」は、福祉施設の一部です。ここで働く障がいを持つスタッフの事を考えて、広い店内なのにも関わらずテーブルは6卓のみ。ランチは完全予約制となっていて、客回転率も概ね1回転としているそうです。そのせいか、とてもゆったりとしたくつろぎの時間を過ごせるようになっています。

藤田シェフの前職はダンサー。ダンサー時代、膝の半月板損傷をきっかけに出逢った医師の影響で、食に関心を持つようになったそうです。その結果、海外で料理の修行をし、帰国した後には自らの畑で野菜を育てたりと、精力的に活

動をされています。この藤田シェフの行動力とフットワークの軽さは、そう簡単には真似できないものではありません。

今回の取材の中で、私は驚いたことがあります。それは藤田シェフは、自身と一緒に働いている障がい者スタッフがどんな障がいを持っているのかを知らないという点です。

福祉の担当ではない藤田シェフが、それを知らなくても支障はないのかもしれませんが、普通ならそれぞれがどんな障がいを持っているのかを知ってから、彼らと仕事を分かち合うものだと勝手に思っていました。

「障がいなんて些細なこと」だと語る藤田シェフ。「彼らと一緒に働くのが楽しい」とも言いました。それを裏付けるように、客側の私たちからも、藤田シェフと障がい者スタッフが良好な関係であるのが随所に見受けられました。その光景を目にし、藤田シェフの言葉を聞いた時

が、これまでに私が持っていた常識や固定概念が覆された瞬間でもありました。

「らんどね空と海」の『らんどね』とは、ギリシャ語で「散歩」または「回り道」という意味です。これまでにたくさんさんの回り道をしながらも興味を持ったモノには何でもチャレンジしてきた藤田シェフ。彼を見習って、私も果敢に「何にでも挑戦しよう」と思いました。

新しいことに挑戦することで新たな出会いや発見があり、それが今までの経験や知見と化学反応を起こすこともあるでしょう。その化学変化が自分の中の常識や固定概念を崩し、更なる「新しいこと」や「新しいもの」を見せてくれるようになるかもしれません。



自分の出番を待つ障がい者スタッフのみなさん。どのスタッフとも仲が良く、仲間同士和気あいあいとした雰囲気を感じることができます。

各種のイベントも随時開催 代表が語る「入り口」とは

布施 まず、「Ubdobe」という名前ですが、これはどんな意味ですか？

岡 造語です。もともと僕は「アジュリドウ」という民族楽器の演奏をしていました。その楽器が「ウブドベ」という感じの音を奏でるんですよ。そこから命名しました。

布施 音楽と福祉を掛け合わせたイベントもやっているそうですね。

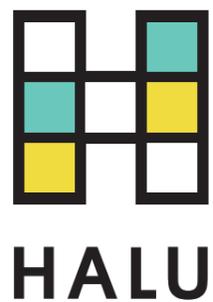
岡 そうです。今は、複合させるのはそれだけではありませんが、福祉に興味を持ってもらうための「入り口」を作るのを目的にして、年に数回ほどイベントを開催しています。

布施 ここ（HALU）は福祉作業所で作られた品物を扱っているということですか？

吉井 そうです。他にも、ユニバーサルデザイン



▲倒れる可能性を極限まで抑え、さらに持ちやすいマグカップ



福祉に詳しくある必要はない入り口だけは知っておいて欲しい

「音楽と福祉の融合」というユニークな活動内容を掲げるNPO法人Ubdobe。代表の岡氏は、自身の母をがんで亡くし、元々は音楽のみの活動であったこの団体を現在の状態に作り替えた。岡氏は福祉について「自分の問題であると感じることがポイント」と言う。Ubdobeはユニバーサルデザインのグッズ販売店、「Ubdobe HALU」を運営している。そこでは、民間団体であるにもかかわらず、福祉に関する相談も受け付けている。今回、このUbdobe HALUを訪れ、代表・岡氏とHALUの店長・吉井氏に話を聞いた。

ンの日用品も販売しています。

岡 あと、この店では商品の販売の他に福祉に関する相談窓口も設けているんですよ。これは、民間ではかなり珍しいんです。

布施 確かに、福祉の相談って言うと行政のイメージが強いですよ。

吉井 HALUのスタッフは、元々は医療や福祉関係の仕事をしてきたメンバーが多いんです。私自身も看護師として働いていました。スタッフ各々が、現場で得られた経験と知識を持っていて、障がいに関する相談が来た時も、幅広く柔軟に対応できるんです。

岡 お客さまから福祉に関する相談が寄せられた時は、福祉の現場を知っているスタッフ同士が、自身の経験をもとにディスカッションすることで、持ち込まれた相談に対して、多角的な対処方法の提案をすることができるとです。

布施 福祉の相談を民間でやることの「強み」みたいなものはあるんですか？

岡 行政の場合、最初からしっかりとルールが決まっています。それに基づいて相談に対処しないといけません。例えば、一つの施設を最優先するといったことも出来ないの、関連する資料を受け取るにしても、時にはとても読み切れない量だったりもします。しかも、管轄ごとに担当や専門分野が細かく分かれていて、相談者が「だらしまわし」のような状態になってしまったりも。その点、民間では行政のような縛りが



HALU~Unique & Universal~
東京都世田谷区 三軒茶屋 1-36-6-203
営業時間/11:00~18:00 (火曜・休日は店休)

<http://halu-shop.com/>



布施博が訊く 布施博 × Ubdobe HALU



代表 岡氏

店長 吉井氏

布施博氏

ないので、明確な意見を提案したり、自由な発想が許されたりと、利点は多いです。

布施 ウチのお袋が認知症で、カミさんのお義母さんも病気を患っているんです。いわば「ダブル介護」状態なんです。福祉や介護の相談ができる窓口が民間にあるのは知らなかったなあ。そういうのがあると心強いですよ。

岡 もっと福祉にはいろんな方法があると知ってもらいたいです。

布施 最初、僕はお袋が認知症だったということにずっと気が付かなかったんですよ。

岡 それが布施さんの「入り口」なんです。

zubits®



生活を豊かにするアイデア商品が所狭しと多数並ぶ店内。中でもすごく便利だと思ったのは、靴紐とマグネットを使って紐を結ぶ手間を省くことができる商品。

マウス型カッター



カバー付きはさみ



本誌3号で紹介のMUKUプロジェクト蝶ネクタイ



紙を張り合わせたピアス



すくすく食器



世の中にはいろんなことを考えている奴がいる。自分の悩みを分かち合える相手が、必ずいる。それにさえ気づけば、世の中はもっと楽しくなるはずだよ。(布施)

問題です。つまりは自分の問題なんです。布施 そうですね。私の話ですが、介護っていうのはやっぱり大変ですよ。仕事を制限しなきゃいけないっていうのが、肉体的にも精神的にもキツイ。先行きも不安になるし。
岡 そういう気持ちは、必ず何かしらの形で全員に訪れるんです。それならば、自分の問題だと各個人が自覚して、同じ問題を持つ者同士、個人ではなく複数で、地域で取り組んでいくべきものなんです。だからみんなの問題だと言えらると思います。我々若い世代は、SNSなどによる情報発信力も持っています。我々が自覚するという事は、すごく力のあることなんです。他人ごとなどと思わず、「入り口」だけでいいので、是非考えてみて欲しいです。

福祉こそ若い世代の力が必要 一人が頑張らず皆が意識する

取材中、Ubdobe HALUで取り扱っている商品をいくつか説明してもらったが、その発想や着眼点には関心しっぱなしだった。中には、障がいの有無に関わらず誰でも便利に使えるような商品も少なからずあった。
そういった商品もUbdobeが企画開発したものだという。そのアイデアは、「障がいを持つ人が使う」という着眼点があったからこそ生まれたものだ。新たな入り口があることで、世の中に新しいものが生まれる。岡氏の語る「入り口」の大切さを体現したものだだった。
「福祉について詳しくなる必要は必ずしもな

い」と語る岡氏と、「誰かの生活が少しでも楽になるのが嬉しい」と笑顔を見せる吉井氏。この2人に共通していたのは、「深く考えなくてもいい」といった雰囲気だった。
一概に「福祉について考える」とは言っても、我々にはそれを考えることができない。言葉に表すことも難しい。しかし、岡氏は「それで構わない」ともいう。それが、「入り口」になれば良いのだと。必要なのは、問題があると自覚することで、その自覚が世の中に拡がり、いつかそれが力になる。必ず良い変化が起きるはずだ。情報発信力のある若い世代の力が必要だという意見にも、説得力があった。自身を楽観的だと評する岡氏だったが、「考えないという事だけが怖い」と述べたのはとても印象的であった。



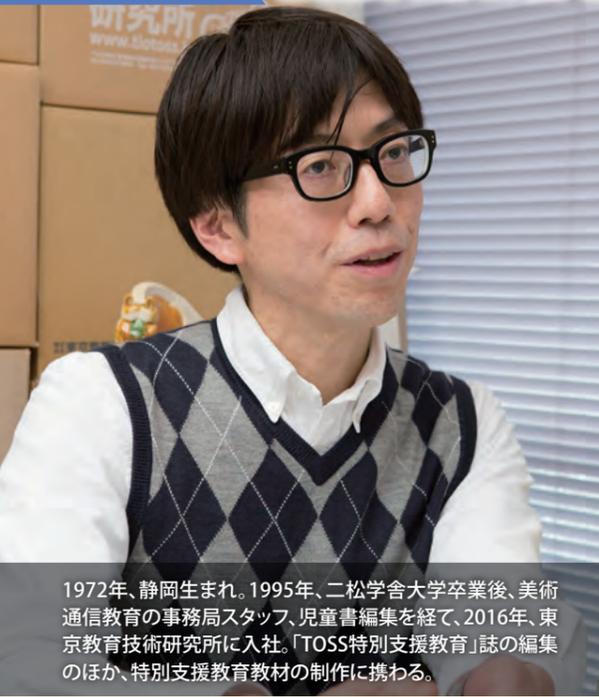
気付かなければ始められない 入り口があれば誰でも気付く
布施 その「入り口」っていうのはさっきも仰っていましたが、何か岡さんなりのこだわりがあるんですか？
岡 入り口を知っていると知っていないのでは出来る事の幅が大きく違ってくると思うんです。私がUbdobeを立ち上げたのも、母親をがんで亡くしたのがきっかけでした。実は私も当初は母のがんに全然気が付かなかったんです。でも、がんのことに詳しくなくても、その入り口だけ知っておけば、決して気付けないものではなかったんです。気付きさえすれば、出来る事はもっとたくさんあったはずでした。布施 確かにそうですね。
岡 だから、いろんな意味で「入り口」が大切だと思うんです。HALUで扱う品物にして



も、デザイン性を重視しなければならぬ。商品の入り口は見た目ですから。日本だと特にそういう傾向があるんじゃないですか。布施 なるほど。
岡 福祉作業所で作られたものに、「可愛いから」「かっこいいから」という消費者の入り口があれば、それを作る障がいを持つ人たちへの興味も持ってもらえるという可能性も出てくるんです。

布施 確かに、ここにあるアクセサリなんかはすごくおしゃれですね。
吉井 イベントなどでHALUの品物を販売しているとき、障がいを持つ人たちが作ったからではなく、「可愛いから」「おしゃれだから」という理由でその品物を手に取って頂けたときは、本当にうれしいです。
布施 入り口っていうのはそういういろんな意味を込めたことなんですね。
岡 がんにせよ、認知症にせよ、入り口だけ分かっていれば、それを改善できる方法がたくさん見つかります。そんな願いも込めて、「入り口」づくりのイベントを行っているんです。福祉っていうのは「みんなの問題」だって気付いて欲しいんです。
布施 「みんなの問題」ですか。
岡 まずは各々が、「自分の問題」である気が付かなければいけないんです。福祉の問題っていうのは、簡単に言ってしまうと自分の親の





1972年、静岡生まれ。1995年、二松学会大学卒業後、美術通信教育の事務局スタッフ、児童書編集を経て、2016年、東京教育技術研究所に入社。「TOSS特別支援教育」誌の編集のほか、特別支援教育教材の制作に携わる。

民間教育団体を母体とし 現場で役立つ教材を提供

榎本 まずは、御社の特別支援教育での関わりと、どういった目的・使命で活動されているのかお聞かせ下さい。

今井 弊社はTOSSという日本最大の民間教育研究団体が母体となっています。TOSSとは直訳すると、「教育技術方法を分かち合う教師の組織体」という意味なのですが、弊社代表の向山洋一が小学校の教師時代の1984年に立ち上げた「教育技術法則化運動」を前身に、1989年に誕生しました。全国から1万人を超える教師が所属していて、授業・教育に役立つ教育技術・指導法を開発し、それを共有財産とし



今井浩司 × 榎本喜明

東京教育技術研究所
K 今井 浩司
Kouji Imai

三栄建築設計
Y 榎本 喜明
Yoshiaki Enomoto

特別支援教育の現場で選ばれて、子どもが熱中する教材を作り続ける東京教育技術研究所

同社では全国の特別支援教育の現場で使われる教材・教具・書籍などを開発・販売している。全国の教育現場で、子供が熱中できる教材を提供してくれると評価が高い。そうした教育現場で発達障がい者の支援に貢献する同社の編集スタッフの今井浩司氏と、一般財団法人メルディアの活動を支援する、三栄建設設計の榎本喜明経営企画部長に対談してもらった。

て全国に広める活動をしています。弊社では、そこで生まれた理論やアイデアをもとに教材・教具・書籍を開発し、それを販売する活動も行っています。

榎本 その活動の中で特別支援教育にも関わっておられると。

今井 そうです。向山が運動を立ち上げた際の理念は、「できない子ができるようにする」というものなのです。学校で跳び箱や逆上がり、掛け算の九九などが出来ない子供はいるものです。そういった子もできるようにして、他の子も成長させていく。できない子ができるようにすることで、学級がまとまり、先生も指導に自信が持てるようになるというものです。ですから当然、特別支援教育もその対象となります。

榎本 なるほど。ではそこで編集スタッフとして働いておられる今井さんがこの会社に入られた理由について教えてください。

今井 前職では美術の通信教育と児童書の編集スタッフとして働いていたんですが、転職活動をする中で弊社の業務や「特別支援教育」のことを知るようになり、前職でのセンシティブな方々との交流で得たことを活かせるのではないかと思います。入社した経緯となります。

榎本 日々、編集スタッフとして働いておられて、特別支援教育の現場からはどんな声が寄せられるのでしょうか。

今井 教材を使うことで学習面や生活態度面で



子供が変わったという感想を頂きます。例えば発達障がい言葉での指導では伝わらなかった子供にも、弊社が出しているカードの教材を使うと視覚的情報として伝わるので、スムーズに行動が出来るようになったり、「怒り」の感情を前向きな認知に導くキットを使うと、友達とけんかをしなくなったといった感想も頂いております。また、教材が子供に成功体験を与えるだけでなく、指導する大人（教師）にも成功体験を与えてくれたといった感想には目からウロコでした。他には、学級崩壊や子供が生き生きと熱中する授業ができないと悩んでいた先生が、TOSSが開催するセミナーや勉強会で学んだ実践を担任のクラスで追試することで、クラスが変わり、子供に対してやみくもに怒っていた



榎本 今の社会や世間に対して伝えたいことはありませんか。
 今井 報道などにより発達障がいについて一般的には知られてきてはいますが、まだまだ教育現場ですら理解が得られていないのではないかと思います。これも教材制作にかかわって下さっ

**理想は難しいかもしれないが
必ず良い影響は与えられる**

た自身も変わり、教師として自信がついてきたという声も頂戴しました。
 榎本 でもやはり一筋縄ではいかないこともあるんじゃないでしょうか。
 今井 はい。イラストや言葉の見せ方で「これがわかりやすくいいだろう」と、良かれと思ったことが実は子供の集中を妨げてしまっていたということがありました。子供の目は実は大人以上にものを見ているものです。制作する側と

**読者
プレゼント
Campaign**



同社が本誌に対して読者プレゼントとして提供してくれた、特別支援教育対応の教材(写真)。応募先などの詳細は27ページをご覧ください。

た先生方のお話なのですが、発達障がいのある子が学級崩壊の原因と言われることがあるそうです。でも、大人(教師)がその子に対する接し方を考えることで、その子が頑張っているから他のみんなも頑張れる、その子がいるから他の子も素直に感情を出すことができる、といったようにその子が周囲に良い影響を与えられる可能性を引き出せます。理想より現実は厳しいとは思いますが、事実、TOS Sではそういった事例もあります。その子を見捨てず、可能性を引き出して頂きたいと思えます。



しては当たり前のことですが、やはり子供だましのものは作れない、と気が引き締められました。榎本 この仕事を続けていることで得られたことや、何かご自身に変化が生じたりといったことはありますか。
 今井 新聞やニュースでは、学校や教師のマイナス面ばかりがクローズアップされがちですが、実際にTOS Sのセミナーや勉強会に参加されている先生方にお会いして、教育に対してこれほど情熱を持って取り組んでいる先生方がとてもたくさんいると感動しました。情熱のある先生方から教育を受けた子供たちが世の中に巣立っているのを目の当たりにすると、これからの世の中も、まだまだ捨てたものではないな、と思います。
 榎本 教育の現場にも希望はまだあると。



特別支援教育対応の教材として、絵で見てソーシャルスキルが身に付く五色のかるたや、見て・分かる力を高めるトレーニングカードなどを開発・販売している。

榎本 我々も一層気を引き締めて、この冊子が多くの方々に手に取って頂けて障がい者への理解が深まるように、努力を惜しまずに活動を続けて頂きたいと思えます。
 今井 そうですね。障がい者の雇用や就労問題などについても詳しく取材されて、特集も組まれているようなので頼もしい限りです。学校の先生や教員を目指す学生の方にも月刊メルディアを読んで頂けると良いですね。
 榎本 ありがとうございます。
 今井 弊社としても是非ご協力させて頂きたいので、読者プレゼントの形で弊社の「特別支援教育教材」を提供させて頂ければ、と。そしてもし使えそうだと思ったら、是非とも使って頂いて、弊社教材を知って頂ければと思います。

今井 私も大人になるまで多くの先生にお世話になったわけですが、自分が教室だけで見かけた先生の姿はほんの一部でしかなく、その陰では子供のために授業や課外活動の準備を一生懸命して下さっていたのだなと、当時の先生方に感謝の気持ちを持つようになりました。
 榎本 障がいを持つ親御さんやまだまだ情報が行き届かず不安を抱えている方たちに何を伝えたいですか。
 今井 特別支援教育教材に携わって下さった先生方からは、発達障がいのある子が学校や集団生活の中でうまくいかない時、「この子はダメなんだ」と学校現場が決めてしまおうことがよくあると聞きます。とても残念で悲しいことです。ところが、教育の方法で子供を良い方向に変えられるのだとその先生方は仰っていました。褒められたことのない子ども自己肯定感を高めて大人に成長させていくことが大事なのだ。これは弊社代表の向山が言っていることなのですが、「教育は手品ではない。瞬時に変わることもありえない。教師も子供も全力を尽くしてもなお、目にも止まらぬささやかな変化しか生まれない」のだと。何がその子にとってベストなのか、当てはまるものを探しながらその子が時間をかけて変わっていくのを見守ることが大事なのではないかと思えます。その子自身は決してダメではなく、方法によって変えられることがあると信じて接して頂きたいと思えます。



はじまり

水越けいこ連載

5



シンガーソングライター 水越けいこ

1954年山梨県生まれ。1978年「幸せをありがとう」でデビュー。TBSの朝の番組「8時の空」に田中星児と共にレギュラー出演。その後シングル「ほほにキスして」「Too Far Away」がヒット。現在はダウン症を持つ息子と二人暮らしをしながら音楽活動や講演活動を続けている。

レイの「習い事」のはじまり きっかけは校長先生の和太鼓

こんにちは。各地から春の便りが聞こえてくる季節になりました。私も息子の麗良（れいら）も穏やかなこの季節が大好きです。

今日はそんな大好きな季節、息子が小学校3年生の春を振り返ってみようと思います。

息子が3年生に進級するとき、その小学校の校長先生に新しい方が赴任されました。穏やかなお人柄で優しい笑顔の方でした。息子はそんな校長先生が大好きで、校内で校長先生を見掛ける度に、駆け寄って行くほどでした。

ある日、私が学校に向いた際、息子の普段の様子などを校長先生に伺っていました。会話の途中で雑談になり、校長先生が「和太鼓を長く続けている」ということを知りました。その

頃、私は「息子に何か習い事をさせてみたい」と考えていたので、校長先生のお話を興味深く聞かせて頂きました。私は息子に習い事をさせてみたいと思う反面、息子はダウン症だということもあって、「果たしてちゃんと習えるのだろうか」、「他の生徒さんたちに迷惑が掛からないだろうか」という心配も多少ありました。

しかし、校長先生のお話を聞くにつれ、息子にも和太鼓に挑戦させてみたいと思うようになりました。その思いをお伝えすると、校長先生は「お母さん、安心して下さい！ ぜひやってみましょう！ 他の生徒さんも募って皆でやりましょう！」と、とても寛大に、思いのほか明るく受け入れていただき、和太鼓教室を開催する準備に入ってくださいました。

息子の小学生時代は、いわゆる「ゆとり教育」の頃でしたから、小学校は毎週土曜日がお休み

何より大切なだろうと考えます。

私がステージ上で歌を表現する時、歌う私が楽しくなければ、お客様にも楽しんで頂けないと考えています。息子に対してもそれは同じです。日常生活の中で明るい私を息子が目にしていれば、彼も明るい笑顔になります。このことから、「愛を込めて、楽しんでいく」という事が音楽にも子育てにも、やはりとても重要なのだと気付かされます。

ただ唯一、作品作りの時は、心のチャンネルを少し切り替えます。ある意味、作品作りは孤独な作業ですし、自分との闘い。息子にいつもと変わらず明るい笑顔を向けながら作詞や作曲には集中できません。

独りの時間を作るために、喫茶店や、時には公園に行ってみるなどの工夫をしています。そして、そんな過程で出来上がった作品を、息子に一番最初に聴かせる時が嬉しい瞬間です。

若い頃から沢山のラブソングを作ってきました。最近では母親としての想い、子供達が生きる未来の平和を願う曲など、かつての私では考えもしなかった作品が書けるようになった事は、大きな収穫だと思えます。

数年前のこと。私、プロデューサー、他の作家陣で、「僕の気持ち」という楽曲を制作しました。このプロデューサーの弟さんもダウン症をお持ちなので、「ダウン症に限らず、ハンディキャップを持つ子供たちの視点で歌詞を考えて

でした。その土曜日の午前中を利用した和太鼓教室が開催されることになりました。

他の生徒さんたちの中にも参加希望者がたくさんいて、全部で25人位集まり、毎週土曜日に2時間程度の和太鼓教室が始まりました。

練習が進むに連れ、内容がどんどん難しくなりましたが、息子は家でもよく練習をして頑張りました。習い始めて半年ほどした頃に学校で行事があり、和太鼓教室のメンバーが体育館のステージで演奏する機会がありました。

演奏が終わって教室に戻るとクラスメートが息子に向かって「凄いわね！」「とても上手だった！」と子供らしい表現ながら口々に感動を語ってくれたのを覚えています。

校長先生の優しさと行動力、それが後に息子が色々な習い事に挑戦出来る源になりました。校長先生には今でも感謝しています。

みよう」という事になりました。この曲は多くの人に聴いて頂ける作品になりました。

また、この「僕の気持ち」の楽曲に合わせて息子が歌っている姿を目にすることもあり、胸がとても熱くなる思いです。

今、デビュー40周年に向けて新しいアルバムを制作中です。長く音楽活動を続けて来たので、このタイミングでアルバムを発表するにはコンセプトがとても重要です。そのため、制作にとっても時間が掛かっています。

私が作る音楽は、大ヒットに繋がらなくても構いません。一人でも、または遠い将来にでも、誰かがどこかで聴いてくださって、何かを感じて前向きな気持ちを持つきっかけにさえなってくれば、それだけでいいと思っています。

「音楽」と「子育て」の共通点 愛を込めて楽しんでいくこと

私・水越けいこは、今年で音楽家として40年、息子を育て始めて25年の月日が経ちましたが、いつも考えている事があります。音楽とは「形の無いもの」であり、技術と感性で創り上げるものです。一方、子育てとはとても「現実的で形のあるもの」ということ。

これらはまるで別のことのようにも思えますが、「愛を込めて、楽しんでいく」という意味では、共通している気がするのです。もちろん、どちらも続けていく途中で、時には大きな壁にぶつかり、悩んでしまう事もあります。しかし、どちらにも最終的には前向きな気持ちを保つ心が、



お詫びと訂正 月刊 MELDIA 編集部

本誌3号の15ページ欄外に編集部で挿入した注釈に誤字・誤植がありました。謹んでお詫びすると共に訂正させていただきます。記事のチェック体制を強化・補完し、以降は誤字や誤植のない精度の高い正しい記事をお届けできるよう編集部一同、研鑽に努めます。

今後は、このようなミスを起こさないよう注意することをお約束するに加え、一般財団法人メルディアの基本理念である「社会的・経済的ハンディを抱える方々の『未来』に少しでも希望が持てるように財団の活動を通じて支援する」ことに、より一層尽力してまいります。

■月刊 MELDIA 3号・15ページ/正誤表

(誤) ※1 おもに乳幼児が患う全身性の欠陥炎症候群

(正) ※1 おもに乳幼児が患う全身性の血管炎症候群





知的障がい者と一緒に「ものがたり」を紡ぐ

まず明記しておきます。

今回の「つむぐ」では、障がいを持ちながら、アート作家として活躍されている方と対談をし、そこから得たアイデアで、短編小説を紡ぐというもの。今回、小説の制作に協力して頂いたのは、前号にも登場したアーティストの清野みなさんです。

前半の2ページが、小説の解説、後半の2ページが小説の本編となっています。

それでは解説に入ります。小説を制作するにあたって、みなさんの一番の希望は「争うシーンを入れないこと」でした。それは、特に珍しい意見ではありませんでしたが、この言葉を聞いたとき、実は私はとても驚いていました。なぜなら私は、彼女の絵から全く同じようなイメージを感じていたからです。

前号でも書きましたが、私は、みなさんと対談する前に、予め彼女の作品を見せて貰っていました。実際にお会いするまで、彼女の絵から受けたインパクトを発端にして様々な想像を膨らませていました。その時に、私の中で常に浮かんでいた言葉はなぜか「集合」でした。

みなさんが描く絵は非常に小さくて緻密な、四角、三角、円などの模様が集合体となつて一つの世界を表していました。同系色の色がグラデーション状に配置されていて、一つ一つの違う色で塗られた図形らが、何の違和感もなく調和して仲良さげであるように見えたからです。



色彩・身の回り・争わない 3つの言葉を紡いだ物語

みなさんの口から、争うシーンを入れたくないとこの言葉が出たとき、私は彼女の作品から受けるイメージに対して腑に落ちるような感覚がありました。しかし、これは私にとって一つの問題とも成り得るものでもあったのです。

物語には、多かれ少なかれ争いが存在します。喧嘩などの分かりやすいもの以外にも、例えば葛藤のような自分との戦いや、スポーツのような勝負も「争い」の一種です。

私がみなさんに「どこまでが争いなのか」を確認するという手段もありましたが、私にはそれは無料であるように感じられました。彼女が「争いのシーンを入れない」と言った時に私が感じたもの。それが彼女の根本にあるものだと考えました。そして私は、もちろんその意見を活かすことにしました。

みなさんの絵を通して感じたことがもう一つ。それは、みなさんは間違いなく「色を愛している」ということ。私が「好きな色は？」と問えば、彼女は「全部」と迷わずはっきり答えました。みなさんの持つ「色」に対してのユニークな感覚は、私の中には存在しない感覚です。私と彼女との感覚の差も、小説を作る一つのポイントになるはずはです。

次に、私はみなさんの好きなものについて伺

つむぐ



取材・文
渡邊 希望 脚本家・俳優
1988年神奈川県生まれ。大学時代に現代小説を専攻。2015年「劇団ショートホープ」を立ち上げる。活動は脚本家と俳優に留まらず演出家としても活躍し、音響も手掛けるなど、多岐に渡って才能を発揮する。

「みなさんと私との短編小説」「争いのない物語にしたい」

アール・ブリュット、生の芸術。

知的障がいを持つアーティストが創作したものを指してそう呼ぶことがあります。これだけを聞くと、「創作者が障がいを持つからそれも考慮して鑑賞しよう」というような意味に受け取る方がいるかもしれません。

皆さんはアール・ブリュットを実際にご覧になったことはありませんか？ 見たことがある方なら、先述したような考えには至らないはずですが、「誰かに感動を与えるものであれば、それは芸術である」。彼らの作品は紛れもない芸術だと

うと、動物であれば「チャボ、好きなことは「食べる」というように、彼女が挙げるものどれも彼女の日常にあるものでした。これをどう捉えるかも、物語を紡ぐカギとなります。

以上を踏まえて、今回の小説のポイントとなるキーワードは、「色彩」、「身の回り」、「争うシーンを入れない」の3点と決まりました。

読者の皆さんにお願いしたいことがあります。作中に「旅人」が登場しますが、彼が旅に出る前のこと、そして旅を終えた後のこと、この2点を考えてみて欲しいと思います。

「争うシーンを入れない」という彼女の希望に対する私なりの「答え」をそこに込めてみたからです。では、「砂漠と旅人」をどうぞ。



みなさんは好き嫌いがはっきりしており、彼女が持つ芸術性を感じました。彼女は掃除好きらしく、実はこれも小説の発想に活かされています。

砂漠と旅人を見る人

砂漠を歩く旅人が、おもむろに水筒に手を伸ばすと、思ったより軽かった。旅人は飲むのを躊躇した。足を止め、深く息をついた。汗が地面に二滴垂れる。旅人は、その二滴を見つめた。二つの汗のシミが砂の上で少しずつ広がる。もう少しでシミ同士がくっつきそうだったが、日光が干上からせ、シミが一つになることはなかった。交わるというのは難しいのかと旅人は思った。

水を少し口に含み、前を向くと一面の砂が今までとは違って見えた。ただの黄色に見えていた物が、今は砂が作る形の一つ一つや、明暗のくっきりした影が目に入る。

旅人がオアシスに着いたのは、夕方のことだった。黄色かった世界が半分が赤く染まっている。空は赤いはずなのに、水面は美しい水色に見えた。旅人はのどを潤し、木陰に腰かけた。

赤と青のコントラストの空を見上げると、さらに白い月までが浮かんでいた。厳しい自然の中にいて、自分は苦しはずなのに、見渡しても見渡してもそこは美しい世界で、旅人は少し笑った。

旅人は息が上がるのも心地よく感じていた。そして歩きながら楽しそうに呟いた。

「たいへんだね」

その時、少年が彼のつぶやきに答えた。

「砂漠は大変ですよ」

旅人は驚いたような顔をした。

「そっか、君がいたんだね」

「あなたが話しかけるなど言っただけですよ。誰かがガイドをしないと危ないですから」

「ああ、今日までありがとう」

旅人は思い出したようにこう続けた。

「大変って言ったのは砂漠を歩くことじゃないよ。この世界を見ることが、だ」

「世界を見るってなんですか？」

「砂山を見ても、足跡を見ても、砂粒を見ても、どこを見ても、どっやって見ても、いつ見ても、違う良さがある」

旅人は、その凄さを理解し切れないことが寂しいかのような言い方だった。旅人は続けて少年に尋ねた。

「どうして最後に僕に話しかけたんだい？」

「人と話したそうに見えただけです。迷惑でしたか？」

旅人はまた驚いた顔をした。そのあと少し笑って、少年に「よく見てたね」と言っただけでチップを多めに払った。

食事をしながら、旅人は砂をすくい持ち上げて眺めた。黄色というよりは白に近く、触り心地がとてもいい。まだ昼間に溜めた熱が残っていて、裸で寝ころんだら気持ち良さそうだなと思った。

夜になって、砂漠は風が強くなった。旅人はテントの中に寝ころがり、天井を見ていた。

真っ暗な中に、ランプだけが灯って、テントの中はオレンジと赤が揺らめいている。

旅人は、自分はどんな色に染まっているのだろうと想像した。想像した自分は、濃い影が鼻にできて、ポロポロの顔をしながらも、目が輝いている男らしい姿だった。

次の日も、雲ひとつない青空だった。金色の砂と空の青で、世界の色は二色だけであるかのような感覚になった。

旅人は朝起きると、いつもはコーヒを飲んでしたが、砂漠では飲むことはできない。カメラミルクを温めて飲んだ。

旅人はカメラを取り出し、自分を撮った。その出来栄を見て、旅人は少し微笑んだ。写真には、彼と砂漠と空だけが写っている。

荷物をまとめ、旅人はまた歩き出した。今日が砂漠を歩く最後の日だった。

歩き始めると、旅人は足がとても軽いことに気が付いた。周りを見ながら、砂の踏み心地を確かめながら、軽快に、しかし噛みしめるかのように歩みを進めた。

つむぐ

ミナさんが描き上げる絵は優しいものであった 今回の小説を書き上げた時に改めてそう感じた

争いが起きないようにと心がけて小説を書いたのは、私にとって初めての経験でした。そのため、小説の制作中には様々なことを考えました。平和について、傷つくことについて、幸せについて。とてもスリリングで楽しい執筆となりました。

実を言うと、この小説は「ミナさんの人となり」を現した」というような作品ではありません。彼女の絵から感じたものに対する、「私からの返答」にしたいと考えて書いた物語です。皆さんの目にはどう映ったのか、その感想などお聞かせいただけたら嬉しいです。是非、お便りやご感想などをお寄せください。

今回も「つむぐ」を最後までお読みいただき有難うございました。





いきいきと自己を表現、パソナハートフル「アート村」のアーティスト(社員)



障害のある社員が心をこめて手作りしています。



東京都千代田区
株式会社パソナハートフル

人材派遣大手のパソナグループ内
にあって、障がい者雇用を促進する特例子
会社のパソナハートフルはそれを専門とするだ
けあって、極めて先進的な障がい者雇用を進めて
いる。同社のコンセプトは「才能に障害はない」。この
コンセプトの下、さすがは人材派遣の会社というべき
か、障がい者の得意不得意に合わせた適材適所の人
材配置をしつつ、6つの事業を行なっているのだ。ユ
ニークな同社の取り組みについては、今号と次号の
2号に渡って連続紹介していきたい。

聞き手/MELDIA GROUP
三栄建築設計・榎本喜明



一人ひとりの才能を活かしながら、いきいきと働いています。



雇用弱者の職業マッチング
自然な流れで事業化を推進

—— 大手企業にあって障がい者をこれだけ積
極雇用しているケースは稀かと思われれます。ま
ずはどういった経緯で御社は誕生されたのかを
お教えてください。

坂口 もともと人材派遣のグループ企業です
から、最初は家庭に入った女性の再就職が事業の
中心だったんです。シニアの雇用などにも広げ、
いわゆる雇用弱者のマッチングに取り組みよう
になって。ですからそういった意味では障がい
者の特性を生かして活躍の場を広げていこうと
いうのも当社では自然な流れと言えます。ま
た、6つある当社の事業の1つのアート事業に
関しては、当社の立ち上げ前から一般の障がい
者が描くアートの支援などを行っていたという
経緯があります。そして本格的に2003年に
当社を立ち上げ、アートの携わる社員や庶務業
務に携わる社員がいてもいいのではないかと



株式会社パソナハートフル
取締役 東京事業部長
坂口 亨

- 6つの事業 ▶ 受託業務
- アート村
- アート村 工房
- ゆめファーム
- パン工房
- コンサルティング サービス



—— そうは言っても最初からスムーズに事が
運ぶのは難しいと思います。
坂口 誰にでも個性があるので、一緒にいる時
間を長くしたり、いろいろな仕事にチャレンジ
してもらったことで、その人の個性や得意・不得
意を見極めながら指導してきました。もう一つ
重要だったのが、グループ社員の理解・啓蒙です。
グループ内の庶務業務を預かる仕事として事業
を拡げてきたので、最初はなかなか理解を得ら
れにくい部分もありました。そこを頼み込む形
で仕事をもらってアウトプットしたら、成果物
のクオリティーの高さが評価されたのです。そ
こから徐々に仕事を広げて、200人を超す社
員の仕事が切り出されるようになったのです。
200人のうち約6割が知的障がい者、残りの
半分ずつが精神・身体障がい者です。理解・啓
蒙という意味で言えば、「ダイバーシティ」とい

う言葉がこれだけ言われているのに、どうして
障がい者の雇用だけが義務という言葉が付いて
いるかですね。シニアの65歳までの再雇用はあ
りますが、外国人の雇用も含めて、義務とは付
いていません。義務と付くと、「どうしてもやら
なきゃいけない」ところから入ってしまいます
よね。
—— 障がい者雇用を広げる上では庶務的な業
務が仕事と働き手のマッチングを取りやすいと
いうことですか？
坂口 正直な話、庶務的な業務というのは生産
性が下がるので、目の前の仕事に負われて後回
しになりがちです。誰かに任せられるのなら任
せたい。一方で、障がいを持つ方はこういう仕
事に比較的向いているんです。彼らには健康者
が勝手に持つてしまう固定観念が少ない。だか
ら、決まったマニュアルを勝手に工夫してしま
うということが少なく、正確で質の高い成果物
が短期で上がって来る。健康者だとその人のや
り方で勝手に工夫してしまっ、結果として仕
事の要求とは違ったものが上がってしまうこと
があります。仕事のマッチングとしても、庶務業
務に適した障がい者をマッチングさせた方が高
いですし、定着率も高いです。また、ご本人た
ちがそういった仕事を望む傾向もあります。当
社には年間20人くらいの方が入って来ますが、
採用の過程は通常の採用と同じです。ただ当社
では実習に重きを置いていまして、障がい者の



一個の会社単体だけでなくグループ全体としてこれ
だけ障がい者への理解があって、かつ積極登
用をしている取り組みには驚かされる。(榎本)

インターンシップで何日か実際に働いて頂きま
す。何日かは一緒に働いているので、入社する
前からおおよその得意・不得意を把握した上で
の採用になります。給与面でも同一賃金同一勞
働の考え方で、同じ業務であれば同じ賃金です。
—— 読者の方々に訴えたいことなどありまし
たらお願いします。
坂口 私が思うのは、「障がい」という言葉があ
るから障がいと言っているだけで、その言葉が
無ければ何と呼んでいたのだろう、と。もしか
したら個性かもしれないし、人格や才能がもし
れない。障がいと言うからマイナスイメージが
付いてしましますが、当社の社員を見て頂いて
も、障がいなのか才能なのか分からないところ
があります。だから障がいというのは個性のよ
うなものだと感じて頂ければ、マイナスイメー
ジはなくなるんじゃないかと思えます。





そもそも成年後見制度とは
どういう制度なのかを知る

岡野 大矢さんご自身は成年後見制度という制度について聞いたことがありますか？ また、どんなイメージをお持ちでしょうか？

大矢 社会の時間に聞いたことはありますが、正直な話、漠然としたイメージはあるんですけど、正確な知識はほとんどありません。高齢者の方によく適用されるという話と、高齢者の方以外でも使われるという話なら聞いたことがあります。

岡野 では、まず全体像から説明します。定義的な言い方をすれば、あるご本人に判断能力が不十分な場合に、その本人を法的に保護し、支えるための制度です。

大矢 どういった方のための法律なんですか？

岡野 本人に判断能力が不十分というのは精神的障がい者、精神障がい者などがこれに当てはまります。こういった方の場合は、本人に十分な判断能力が不足しているの、例えば詐欺に遭ったり、余計なものを買わされてしまう可能性があります。それを、後見人を立てることで防ぐのです。そして財産を守ります。また、例えば高齢者の場合だと、体が動かなくなつて身のまわりや日常生活がままならなくなつて



くれば、介護施設を利用してヘルパーさんに来てもらって食事から排せつまで含めた身のまわりの世話をしてもらう必要が生じます。あるいは、老人ホームに移って24時間体制の支援を受けなければいけなくなるかもしれません。それが認知症などが進んで本人に十分な判断能力が無くなった場合、施設利用の申し込みから施設に対する料金の支払い、そのための手続きをしなくてはなりません。本人にはできません。それを後見人が代わりに行なうわけです。だから、財産だけでなく、ご本人の日常的な生活を守り、支援していくための制度なんです。

大矢 なるほど。制度の大枠については分かったような気がします。では、どんな人が後見人になるものなんですか？

岡野 家族や親族がなる場合もあれば、親族にそういう人がいなければ、私のような弁護士や



司法書士、行政書士といった法律の専門家、もしくは社会福祉士のような福祉の専門家になるのが一般的ですね。

大矢 友達や仲が良い人でもなれるんですか？

岡野 基本的には誰でもなれますが、実際にやることは様々な支払いや手続きなどの通帳管理や土地建物といった財産があればその管理と、やるのがたくさんあるうえ、ご本人に大きな財産があれば責任も重大になりますから、家族か親族、専門家に自然に選ばれてしまいます。大矢 どういったプロセスを経て後見人が決ま

弁護士
岡野和弘
Kazuhiro Okano

女優・タレント
大矢真那
Masana Oya

最近、耳にする「成年後見制度」は
知的障がい者の将来を
支援するためにも使える制度

弁護士が
解説!

成年後見制度は知的障がい者の生活支援にも使える制度なのだが、残念ながら未だ認知が広がっておらず、活用される事例は少ない。そこで、本誌の連載「親なきあと／知的障がい者のための生活支援」でお馴染みの弁護士の岡野和弘先生に、改めて成年後見制度とはどういったものかを、イチから解説してもらった。



岡野 誰かが後見人に立候補したとしても、最終的には家庭裁判所が決めるので、候補者になれないこともあります。例えば、親の後見人に子供のような将来相続を受ける可能性がある1人の相続人が立候補した場合、ほかの相続人との間で対立があったりした時、相続の問題に発展する可能性があります。裁判所ではこれは認めません。兄弟など他の相続人に公平を期するという考え方が裁判所にはあるわけです。

大矢 そうなると家族としては複雑ですね。

岡野 でも、後見人は毎年裁判所に報告をする義務がありますし、裁判所も後見監督人を付けてチェックをするので、専門家に任せてしまった方が安心と言えます。だから、悪い人が後見人にはなれない制度になっています。



大矢 では、必要に迫られたからという場合でも、将来に備えるというものでも知的障がい者には使える便利な制度ということですか？

岡野 そういうことになります。ところが実際に利用されるのは認知高齢者の場合が多くて、世間でもその部分はクローズアップされているんですが、正直、障がいの相談はほとんどありません。使える制度なのに知られていないから、親御さんに後見制度を使うという発想が生まれることすらない。親御さんが元気なうち

私のような世代の人もきちんと知っておく必要が

大矢 もう一つ、任意後見制度というものもありましたよね。

岡野 はい。法定後見制度は後見制度を使う場合に裁判所から認めてもらう制度でしたが、こちらは契約によるものです。将来的に支援が必要になったら支援してもらおうことを私のような弁護士との間で契約しておくのが任意後見制度。将来に備えて対策を取るのが任意で、必要に迫られて決めるのが法定と言っているいかもしれません。

大きく2つに分かれる制度 将来に備えて上手な利用を

岡野 判断能力が全くない場合は、おおよそ年齢で5〜6才レベルとされています。認知症ではテストが行われるんですが、例えば、「お歳はいくつですか？」「私たちがいまいるところはどこですか？」「これから言う3つの言葉を言ってみてください」といった質問が行われます。このテストは30点満点で、20点を下回ると成年後見、20点台は保佐、補助だとしたい堪えら

るものなのですか？

岡野 家族や親族、専門家が、裁判所に「自分がやります」と申し立てて、裁判所の許可が得られれば実際に制度が始められるというシステムになっています。制度の全体像はそういう感じですね。次に制度の中身について説明します。

大矢 はい。よろしくお願ひします。

岡野 成年後見制度には大きく分けて、「法定後見制度」と「任意後見制度」の2つがあります。ここからは「法定後見制度」を念頭に置いた話になります。「法定後見制度」は民法に基づいた後見制度です。そしてさらに「法定後見制度」は、成年後見と保佐、補助の3つに別れています。言葉は難しいですが、本人の判断能力の大小で3つに分かれていると言え、話は比較的簡単でしょう。成年後見が本人の判断能力が全くない場合、保佐がかなり不十分な場合、補助が一番軽くて不十分な場合ですね。

大矢 その判断能力の十分・不十分は誰が・どう判断するんですか？



先生の分かりやすいご説明で制度のことがよく分かった気がします。制度自体の認知度が上がって、制度が必要な人へ支援が届けば良いのと思いました。

は障がいを持つお子さんへの支援も可能ですが、親御さん自身が高齢化して認知症などになってしまった場合は、その後の面倒は誰がどう見るか。これは死活問題にもなってきます。

大矢 私自身、勉強不足で後見制度が、障がいを持つ人たちの役に立つものだなんて知りませんでした。私と同じ年代の人も、こういった制度があることをきちんと知っておくべきですね。将来、自分の周りの人でこの制度が必要になる人がいたら、アドバイスが出来たりするかもしれないので、是非知っておくべき制度だということですね。ありがとうございます。とても勉強になりました。

れるといった具合です。

大矢 知的障がいの場合もそういったテストをするんですか？

岡野 知的障がいの場合は裁判所で決まった書式があるんですが、それに従って主治医が診断書を書く形を取ります。徐々に判断能力を失っていく認知症と違い、知的障がいの場合は幼少期からそうと分かる場合もあるので、主治医がいれば、その主治医がある程度は判断できます。

大矢 何人か後見人になれる人がいたとして、どういう基準で後見人が選ばれるんですか？



募集&告知

各種募集と告知

知的障がい者向けの就労情報や各種告知と募集を掲載しています。布施博または大矢真那が取材に向う「訪問先」も募集しています。

情報&告知 読者プレゼント

各企業や団体からの募集や告知

知的障がい者向けの就労情報や、支援情報、その他の情報または各種の告知を掲載しています。読者プレゼントもあります。

布施博&大矢真那の訪問先／取材先を募集しています



知的障がい者を雇用する企業や団体、知的障がい者施設、学校、場所、スポーツ会場などへ布施博または大矢真那が直接お伺いして取材させていただき、本誌にてご紹介いたします。

■応募条件

知的障がい者を雇用している(雇用予定を含む)企業や団体、知的障がい者施設(学校を含む)、知的障がい者が活躍されているスポーツ団体、スポーツ大会、地域、場所など

■お問い合わせ

下欄にある「一般財団法人メルディア」事務局まで電話またはメールなどにてご連絡ください

※取材に関して費用等は一切かかりません



募集や告知などの情報を無料で掲載しています

一般財団法人メルディアが発行する「月刊メルディア(本誌)」では、障がい者を雇用する企業や団体、各種の養護施設または学校などの募集ごとや告知などを無料で掲載しています。「知的障がい者を雇用したい」「障がい者施設で開催するイベントを告知したい」などがありましたら、下記の一般財団法人メルディア事務局までお問合せください。

一般財団法人メルディアの活動方針ならびに本誌の編集方針にそぐわない内容、冊子の配置協力をお願いしている各企業の基準に抵触する内容、営利目的のみの内容、特定の宗教や信条に関わると判断される内容、反社会的と判断される内容、公序良俗に反する内容等については掲載をお断りする場合があります。あらかじめご了承ください。

一般財団法人メルディアへのご支援とご協力を募集

障がいのある子供を持つ親の苦労や将来への不安は、他の人には計り知れないほど大きなものがあります。さらに、それが寡婦・寡夫家庭であった場合、経済的な負担、苦労、不安なども一人で背負わねばならない状況に置かれることもあります。

私たち「一般財団法人メルディア」は、会報誌「月刊メルディア」を通じて、誌上に厳選した有益な情報を掲載することで、周囲との情報交換もままならず不安を抱える人たちの情報源として、その一助となれることを目指しています。

私たち「一般財団法人メルディア」の活動に対するご支援(取材協力・協業の相談・各種支援・支援金・寄付)など、当財団の趣旨に賛同してご協力を頂ける企業・団体・個人を募集しています。右記にある当財団の事務局までご相談ください。

お問い合わせとご相談はこちら 一般財団法人メルディア

〒163-0632 東京都新宿区西新宿 1-25-1 新宿センタービル 32F
一般財団法人メルディア 事務局/担当: 鷺坂(さぎさか) 宛て
TEL: 03-5381-3213 / MAIL: prd@san-a.com



一般財団法人
MELDIA

右ページ内の求人の部分に関しては本誌および事務局が斡旋などを行うものではありません。求人に関するお問い合わせは上記に掲載の各企業または各団体に直接お問い合わせください。本ページには最新の情報を掲載していますが、情報提供先の都合等により募集を締め切る場合があります。あらかじめご了承ください。(一般財団法人メルディア事務局)

パッと行動支援絵カード / 学校生活編(4カ国語表記)

3抽選で
名様



東京教育技術研究所のご厚意により「パッと行動支援絵カード/学校生活編(4カ国語表記)」を3名様にプレゼントします。

■プレゼント名

パッと行動支援絵カード/学校生活編(4カ国語表記)

■応募方法

官製はがきに郵便番号、ご住所、お名前、連絡先電話番号をご記入のうえ、下記宛てに郵送してください。

■応募先

〒163-0632東京都新宿区西新宿1-25-1新宿センタービル32F
一般財団法人メルディア事務局/読者プレゼント係

※応募に際してお寄せいただいた個人情報はプレゼントの発送にのみ利用します

薪窯ピッツァと珈琲のお店「らんどね空と海」



■営業日/営業時間

月～土/11:30～16:00

※ランチは木、金、土(11:30～14:30/L.O 14:00)のみの完全予約制

■住所

千葉県船橋市神保町177-8
(新京成線三咲駅よりタクシーで8分)

■ご予約

TEL 047-401-3285

■コース

「ピッツァコース」1,700円(ピッツァ・サラダ・ドリンク)、「ランドネコース」2,900円(前菜盛合せ・サラダ・スープ・ピッツァ・デザート盛合せ・ドリンク)の2コースからお選びいただけます。

協業していただける知的障がいのあるアーティスト・企業を募集



知的障がいのあるアーティストが描く作品をプロダクトに落とし込み、社会に提案するブランド「MUKU」は、協業していただける知的障がいのあるアーティストや協業を希望される企業を募集しています。ぜひお気軽にご連絡ください。

名 称 MUKU PROJECT

募 集 内 容 知的障がいのあるアーティスト/
協業企業

所 在 地 東京都港区赤坂9-1-7
秀和赤坂レジデンスホテル654号

お問い合わせ TEL: 080-2844-8293

ホームページ <http://muku-official.com/>





Design Your Life
MELDIA
GROUP

同じ家は、つくらない。

05 MELDIA CONTENTS 2018 MAY.

01 | 知的障がい者を応援！

千葉県船橋市・らんどね空と海 編

05 | トウテミル！

MC & 女優・右手ナギが各方面に「問うてみる」

06 | 一般財団法人メルディアとは？

メルディアの基本理念、財団概要、支援事業

07 | 布施博が訊く

東京都世田谷区・Ubdobe HALU 編

11 | 特別対談

東京教育技術研究所・今井浩司 × 三栄建築設計・榎本喜明

15 | 水越けいこ連載「M size / はじまり」

水越けいこが愛息・レイくんとの日々を綴る

17 | つむぐ

知的障がい者と一緒に「ものがたり」を紡ぐ

21 | 知的障がい者雇用企業訪問

東京都千代田区・パソナハートフル 編

23 | 「成年後見制度」を知ろう

知っておくと便利な法律や制度を弁護士が解説

27 | 求人情報と各種募集／プレゼント

知的障がい者向けの求人情報と各種の募集など

28 | 募集と告知

取材先募集と協賛の募集など

MELDIA 5月号 2018年3月25日発行

発行元 / 一般財団法人メルディア事務局

発行人 / 小池信三

編集 / 株式会社サン・オフィス

編集人 / 東宮恵美

編集長 / 山口慎市

進行 / 東宮恵美、山口慎市、谷田貝巨介(新村印刷)

編集部 / 東宮恵美、都筑亮太、渡邊希望

ライター / 水越けいこ、大矢真那、山口慎市、渡邊希望、

右手ナギ、加島和彦、横関寿寛

カメラマン / 加島和彦、工藤裕之、吉岡晋

ヘアメイク / 鳥取まりこ

デザイン / 有限会社フレッシュ・アド

印刷製本 / QREAS株式会社

協力 / MELDIA GROUP 株式会社三栄建築設計、榎本喜明、岡野和弘、
社会福祉法人地蔵会、らんどね空と海、藤田承紀、Ubdobe HALU、
株式会社東京教育技術研究所、株式会社パソナハートフル、
株式会社 TDP ミュージックパブリッシャーズ、PHOTO MIO JAPAN、
新村印刷株式会社、株式会社協同エージェンシー

本誌の無断転載・複製を禁じます

2018©All Rights Reserved. 一般財団法人メルディア&月刊メルディア/
MELDIA GROUP 三栄建築設計/サン・オフィス



次号予告

MELDIA VOL.6

2018年4月25日
発刊予定

一般財団法人メルディア

〒163-0632
東京都新宿区西新宿 1-25-1
新宿センタービル 32F
一般財団法人メルディア事務局
TEL: 03-5381-3213
MAIL: prd@san-a.com

メルディアグループ

<http://www.meldiagroup.com/>

株式会社三栄建築設計
〒163-0632
東京都新宿区西新宿1-25-1
新宿センタービル32F



まだ25年、
これからのメルディア